《編集・発行》真鶴町自治会連合会　《発行代表者》朝倉　隆　《編集責任者》青木友晴

令和5年12月15日
第113号

真鶴 自治会だより

皆、皆が住みよい町に

防災講演会から学ぶ

東日本大震災の教訓から考える地域防災
～誰一人取り残さないために～

令和5年10月28日、町民センター講堂において、福島大学特任教授である天野和彦氏による地域防災についての講演を拝聴した。同教授は日本各地で発生した大規模地震等の避難所へ出向き、復興支援の陣頭指揮を執るなどして、自ら体験した避難所生活のあり方や防災自体の考え方について熱意と情熱を持って講話をされていた。

もし避難所を開設するような災害が発生したら、避難所の運営を私たち自治会や多くの支援者らで運用して行かなければなりません。私たち支援者の究極の目的は被災者の命を守ることで、その考え方や取り組み方について要約すると次のとおりでした。

◆防災の考え方を「モノの防災」から「考え方の防災」へ転換することが必要。モノ（物資）は必要だが沢山あれば良いというものでなく、その前の考え方が大事で、被災者は「なぜ自分たちだけがこんな災害に遭わなければいけないのだ」と感じている。被災者の人権を守る観点でも人道支援を考え直さないといけない。

◆避難所は生活再建に向けての青写真を描くところ。避難所生活を送ることにより、災害関連死や生活再建の妨げとなってはいけない。生活再建は被災者の権利である。

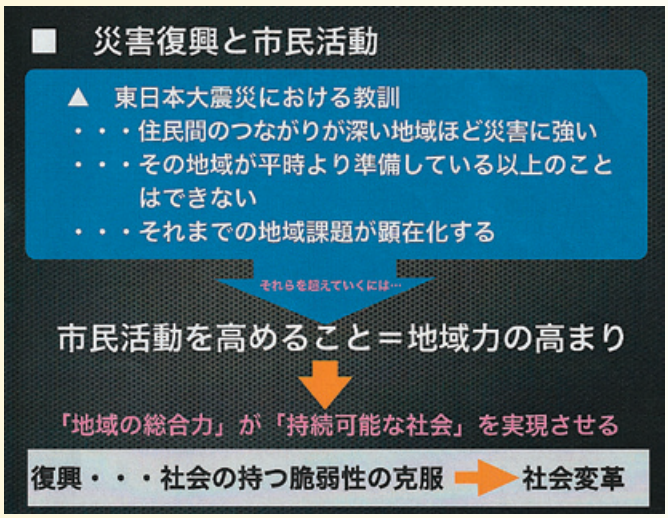
◆支援者は、命を守るために人と人の繋がりを作ることが重要。それには交流の場の提供と自治活動による支えあいが必要。共通の目的を持った被災者同士の交流できる居場所作りが必要。（例えば喫茶サロン）

◆地域実態に即した活動を可能にするため「防災計画」と「支援者情報」の作成は必須である。

東日本大震災の被災者は50万人で11年経過した現在も避難所生活を送っている避難者は数多くいる。

今後首都直下大地震では700万人、南海トラフ大地震では950万人の避難者が推測されている。誰一人取り残さない防災とは実際にはどうやって取り組んでいけばよいのか。私たちの防災意識は各種会合で議論されたりして関心は高まっています。単位自治会ごとの防災計画は作成されているものの緊急時に柱となりうるのか。講演の趣旨を私たちの防災計画に取り入れながら、定期的な訓練が必要であり、訓練を通じて足りないところを補充したりすることが肝要であると痛感した。

（広報部　土屋勝幸）



寄稿

「真鶴半島を取り巻く豊かな海とこれから」

真鶴町立遠藤貝類博物館　学芸員　栢沼勇魚（かやぬま いさな）

国内でも有数の豊かな海として知られる相模湾、その西部に位置する真鶴の海は海洋生物の宝庫です。溶岩由来の固い岩盤には多くの付着生物や海藻が生育し、隠れ家や餌を求めて多くの生物が集まることで、非常に豊かな生態系を構築しています。そんな真鶴ですが、豊かな海を持つ町として考えていく必要のある課題があります。それは、海洋ゴミの問題です。海という場所は、陸から出た様々なものが最後に行き着き蓄積していく場所です。

例えば、山から染み出た栄養は、川によって海へ運ばれ、植物プランクトンや海藻の肥料となり、豊かな海の生態系を支えています。相模湾では、酒匂川や相模川などがこの役割を果たしています。

しかし、最終的に海に行きつく物の中には、海にとって悪影響を及ぼすものもあります。この中で特に問題視されているのが、プラスチックゴミです。プラスチックゴミの問題は、自然環境下で分解されないという点にあります。5㎜以下まで細かくなったものをマイクロプラスチックと呼びますが、この状態になったものは回収が不可能といわれており、海洋生物による誤飲の事例も多く報告されています。また、有毒な化学物質が塗布されたプラスチックについては、生物にとって直接的な悪影響を及ぼす恐れがあります。

真鶴の海岸を歩いていると様々な漂着物が見られますが、その中でも、洗剤の容器やお菓子の袋、ペットボトルなど、日常生活の中で出されるプラスチックゴミが多く見受けられます。つまり、生活から出たゴミの一部は、どこかの段階で人の手を離れてしまっているということです。海に流れ出てしまうゴミの多くは、人間が管理しきれなかったものであると言えますが、裏を返せば、普段より少し意識して管理を徹底することで、海に流れ出るゴミの量を減らすことができます。

寄稿

「静かな背戸」の石垣の影から

観音整体ラボ　山﨑陽軒

真鶴の街は港を中心として、斜面に沿って家が建てられ、段々畑のように形作られました。街の中心部を横に貫くメインストリートと、そこから港へ向かう数本の軸道は、公共的に使われ、家々をツリー状につなぐ半私的な路地も無数に張り巡らされました。日常的な用事で行き来するその半私的な細い道を、今では「背戸道」と呼んでいます。

土肥道地区

家々の裏木戸を結ぶところから、このように呼ばれるのだと考えられますが、私が子供の頃は背戸道とは言わず、それぞれの道を固有の名前で呼んでいた記憶があります。車の入り込めない路地は子供たちにとって絶好の遊び場で、メンコやベーゴマ、鬼ごっこや隠れんぼに夢中になれる、ワクワク感あふれる場所でした。家と石垣に挟まれた空間で、「実のなる木」から夏みかんや金柑、柘榴や枇杷をもいで食べるのがおやつ代わりでした。

今年は関東大震災から100年目にあたります。真鶴に自動車の通る広い道ができたのは、震災で壊滅した町の復興道路として、まだ開業したばかりの真鶴駅と真鶴港をつないだのが始まりでした。資材を運ぶトラックがすれ違えるような「大道」のおかげで、町はみるみる復興を遂げ、戦後国有林となった御料林が町に払い下げられると、観光バスが行き交うようになり、街中も「賑わい」を見せるようになりました。

磯崎地区

バブル期を迎えて数十件の大規模開発案件が持ち込まれたとき、真鶴の町は他の数多の市町村とは一線を画す対応をとります。水資源を持たないことを理由として水道の供給を拒否し、開発をストップさせたのです。これをきっかけとして、町民と行政がともに“この町にあるべき暮らしの姿”を考えることとなり、「まちづくり条例」が策定されました。国の「景観法」ができた今では、市町村単位でそれぞれの土地の美しい景観を保存していこうという試みも当たり前になりましたが、真鶴町の「美の基準」という生活風景のデザインコードは、それらに先駆ける先進的な取り組みでした。制定から今年でちょうど30年、美の基準が守られている真鶴は、大きなビルや広い道が街中に入り込まず、古くからの細い道みちがいまだに残り「懐かしい町並み」が保存されています。

「静かな背戸」を散策していると、ときおり「人の気配」を感じ「小さな人だまり」に出会います。そういうとき軽く挨拶を交わし合えるような、豊かなコミュニティが次世代まで残されていくことを願います。

部会報告

防犯防災部

【夏休み期間中の防犯活動】

例年夏休みに入ると、役場職員による日中の見守りと、夕方6時頃から9時頃にかけて広場、公園などの未成年者が集まりそうな場所のパトロールを各自治会で期間中に2～3回実施しているが、近年巡回をしてもたまにしか人に出会わない事、出会っても海岸沿いに偏っている、近年の子供達の遊び方の変化（家の中でゲームに興じる）などにより従来からの夏期防犯活動に問題を感じている。

次年度以降の活動について、従来とは違う方法（人が出ている場所に集中するなどの案）の採用など、どの様にしていったら参加者に負担をかけずに防犯効果が上がるか改善案を年度内に纏められるよう検討を進める。

（飯田 正人）

教育体育部

【後期成人学級】

後期成人学級の第一回は観音整体ラボの山崎さんに「ながが息ストレッチング」を教えていただきました。私たちはストレスに晒されると体が堅く歪んだり、不安が増幅してしまいます。よい姿勢を保つため、呼吸を整え心と体の調和を図りながら健康で元気な人生を歩んでいきたいものです。

続いて『終活』を題材に真鶴町国保診療所の田中さんに講演いただきました。これまでの人生の歩みを手掛かりに、これからの人生をどのようにつくっていけばいいのか整理してとらえること、何を大切に考えなければならないのか気付かされました。

第二回は「小田原市のゴミ減量化に向けた取組み」を環境部の木村さんに報告いただきました。9分類18品目の細分化収集に驚きました。町の生ゴミ処理器の使用やゴミ出しマナーなど、ゴミ問題はひとりひとりの取組みによっても効果が上げられるものです。

生涯学習の視点に立ち、これからも成人学級を推進していきます。町民の皆さんの創意あるご意見をお寄せ下さい。

（佐藤 又左衛門）

編集後記

昨年より自治会連合会では喫緊の重要課題として「防災」と「環境美化」に取り組んでいます。

防災は、今年2月に陸上自衛隊による災害訓練、9月には総合防災訓練を実施、6月と9月の自治会だよりでは「関東大震災100年目に考える」として特集を組みました。

実地訓練と過去の震災を見直す取り組みでしたが、今後いつ起きても不思議ではない大災害にどう取り組んでいけばよいのかを考えるため、10月には「防災講演会」を自治会連合会主催で開催しました。

講演会で特に心に残ったのは避難所では「避難者を孤独にさせない人と人とのつながりが極めて重要」との講師の言葉です。これは今回の自治会だよりの背戸道の寄稿文に書かれている「人の気配」や「小さな人だまり」と共通で、コミュニティの構築が重要なのだと思います。

環境美化は今年何度か特別委員会報告として「ゴミ」問題を取りあげてきましたが、今回遠藤貝類博物館の栢沼学芸員に「海洋ゴミ」について寄稿して頂きました。真鶴の一番のうり（魅力）は「海」だと思います。町の景観を保つため、家庭のゴミ出しの問題以外に、海にゴミを流し出さない取り組みや意識改革が必要ですね。

今回寄稿をご快諾頂きました山崎様、栢沼様、ありがとうございます。

来年も「防災」と「環境美化」は引き続き重要課題として取り組んでいきます。さらに深堀した記事にしたいと思っていますのでご期待下さい。

皆様よいお年をお迎えください。

（広報部　髙瀬 哲夫）

自治会連合会ホームページ
自治会の活動内容を紹介しています。是非ご覧ください。